

B-1-28 COPD 患者における包括的呼吸リハビリテーションの有用性についての検討
国立病院機構道北病院 看護部 前川雅代

【目的】呼吸不全を伴う COPD 患者に対する呼吸リハビリテーション（以下、呼吸リハビリ）の有用性は認められており、運動能力の改善、呼吸困難感の軽減に加えて、健康関連 QOL (HRQOL) の向上が得られる。ただし、呼吸機能障害や呼吸困難感の程度あるいは栄養状態の違いにより、一定条件下での施行には問題が存在する。そこで、個々の症例に合った呼吸リハビリのプログラム設定が必要であり、その上で有効性を評価することが重要であると考えられる。また、患者自身が受動的に呼吸リハビリを行うのではなく、目的を理解し積極的に取り組

み、それらを継続することが看護するに際し必要である。

【方法】COPD 患者 22 名を対象にクリニカルパスを用いて 3 週間の包括的な呼吸リハビリを実施した。呼吸機能検査、6 分間歩行試験などに加えて、リハビリ中には患者自身の自主性および呼吸リハビリに対する意欲の向上、さらには将来的に在宅での継続を目的とし、ピークフローメーターおよび万歩計を活用した。また、SGRQ を用い呼吸リハビリ前後の HRQOL の評価を行った。

【結果】呼吸機能検査では一秒量が 1.18 ± 0.28 から 1.47 ± 0.38 L と有意に増加していた。6 分間歩行試験では歩行距離の延長と回復時間の短縮がみられた (図 1)。また、患者自身リハビリ前後におけるピークフロー値は有意に上昇していた (図 2)。また、HRQOL の評価では SGRQ の activity および総 score が有意に改善していた (図 3)。

【結論】今回導入した包括的な呼吸リハビリでは疾患に対する患者教育も含め、ピークフローメーターおよび万歩計を用いるなどより患者に対する介入が増えたことが患者自身の呼吸リハビリに対する意欲の向上をもたらし、リハビリの継続さらには HRQOL の改善に寄与したと考えられた。

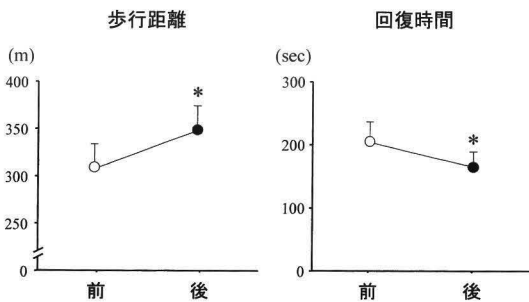


図 1 6 分間歩行試験における歩行距離および回復時間の変化
mean ± SD, n = 22, *p < 0.05

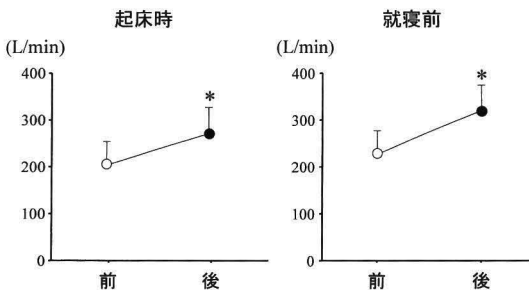


図 2 起床時および就寝時におけるピークフロー値の変化
mean ± SD, n = 22, *p < 0.05

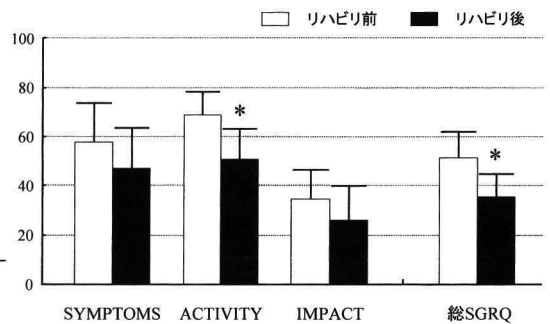


図 3 SGRQ を用いた HRQOL の変化
mean ± SD, n = 22, *p < 0.05